

反逆の詩人パウンドの詩学

橘真紀

はじめに

エズラ・パウンド、モダニズムの旗手として英米文学史に名を残した彼は、詩のなかで異質なものと対極なものと同じ舞台に並び、照応され、混じりあうことを望んだ。批評家のサンフォード・シュワルツが、パウンドの作品には「対極に位置する言葉がひとつになっている構造がある」と述べたように、パウンドは詩において過去や現在、生(life)と死(death)などの対立的・異質なものをあえて結び合わせることで、固定したひとつの世界観への収束を回避しようとしたのだ。しかしながら、パウンドが試みた多様性の促進は、ともすれば、完全な混沌をも生成する危険性を孕んでいた。ウィリアム・バトラー・イエイツが、パウンドの長篇詩『詩篇』を取り上げて「この詩には、時間を通しての伝達はなく、われわれは古代ギリシャから現代のイギリスに、現代のイギリスから中世の中国へと何の注釈もなく移動させられる」と述べ、パウンドの詩には意味をすっかり理解できないようにする「橋渡しのない移行」があると指摘したように、何人かの批評家たちはパウンドの詩には構造上の一貫性に欠ける面があると考えていた。

たしかに、パウンドの詩には、慣習に抗うような面があった。彼は、革命家としての一面を持っており、例えば、伝統や形式などを詩から取り除こうとしたし、また、当時はタブー視されていた性を詩において扱うことで、抑圧された性意識に一石を投じもした。こりかたまつたものを解放するかのように、彼は、こうであるべきと決められたものに抗い、抑圧や制限に反旗をひるがえした。しかし、パウンドの詩は、けして、一貫性に欠けていたわけではない。彼が目指したものは、差異の抑制のない、多様性のある自由な詩であり、そこには、詩を混沌に陥らせないようにしようとする意志が存在していた。

本発表では、パウンドの「水の空間」とも呼べる生成的な詩世界に焦点を当てることで、革新的な詩人の姿勢が詩の中にどのようにあらわれているかを考察することを目的とした。

1. パウンドの詩学：探索航海

詩篇第 59 篇において、パウンドは、“Periplum, not as land looks on a map/ But as sea bord seen by men sailing” 「ペリプラム、それは地図で探せる土地ではなく、船乗りによって発見される海岸である」と述べ、自らの創作法を航海に例えた。批評家のアッカーマンは、ペリプラムという言葉は、パウンドが、古代ギリシャのハンノーの探索航海(“The Periplus of Hanno”)を基につくったものであると説明する。行き先の決まっていない航海の道を、既成の地図に頼ることなく、一つ一つの島に立ち寄り、探索しながら、沿岸に沿って、進んでいく船乗りのすがた。パウンドは、船乗り、自分のすがたを重ね合わせることで、自分にとって、詩をつくることは、地図上で土地を探すような行為ではなく、船に乗って探索をするような行為であると示した。

パウンドは、詩においては、さまざまなエピソードなどの断片を組み合わせ、配置することで、異なるイメージが、混ざり、絡み合い、刺激しあうような場をつくらうと試みていた。色々な作品から抜き取ったイメージを用いたパウンドだが、それは、ただ彼が、既存の作品のイメージを写しとりかっただけではない。彼は、自分が伝えたいテーマをうまく表現するために、色々な作品から、色々なイメージを抜き取り、重ね合わせることで、これから起こりうるイメージの絡み合い、その化学反応を期待したのである。

2. パウンドの詩学：渦巻き

パウンドは、1914 年、雑誌 *Blast* に、ヴォーテックス宣言(渦巻き宣言)を発表するが、そこでは、新しい人間としての詩人のすがたについてこのように述べている。「人間を、知覚が向かう対象ととらえることができる。すなわち、人間を環境のおもちゃ、印象を受け取るだけの存在とみることができる。あるいは、人間を環境に対抗する流動的な力をふるうものとして、単に観察し反芻する代わりに、創造する存在とみなすこともできる。」つまり、パウンドは、詩人とは、外界の印象をただ受け取るだけの受容体として考える見方と、印象を取り入れ、新たなものに作りかえる存在として考える見方があるのだと説明したのだ。

渦巻きとは、外のものをかき集め、内に吸収しつつ、自らも、大きなエネルギーを放出し、旋回しながら、周りに影響を与えるものだ。パウンドが、1910 年に、*Spirit of Romance* というエッセイにおいて、“projective thinkers”(SP,196)と称したように、芸術家は自ら思考し、周りに働きかける存在であり、パウンドはここで、創造的な芸術家のすがた、その流動的な力を持った人間のすがたを強調していると考えられる。

英詩の伝統の制約、その偏狭さから詩を解放するためにパウンドはイマジズムを推しすすめたが、その表現は、感じたままのありのままのイメージを提示するために修飾を徹底的に除いた、硬質な味わいを持つものだった。冷徹な観察による簡潔直裁な言葉は、ともすれば、抑制された、読者を拒絶するようなイメージを形作るようにも思える。しかし、パウンドは、この「渦巻き主義」を標榜する“Vorticism”というエッセイにおいて、イメージとは、もはや、観念ではなく、きらめく交点であり、「渦巻き」そのものであると説明する。つまり、パウンドは、ひとつのイメージとは、ひとつの意味に収まるものではなく、内に熱いものを渦巻かせる、ひとつひとつのイメージが、詩におい、重ね合わされ、絡み、つながりあい、統合されることにより、ようやく、意味をあらわすものだとしたのだとしたのである。

パウンドは、*Guide to Kulchur* においては、このようにイメージが作用しあい、引き寄せあったのちに現れる一つの大きな美しい渦巻き模様を、“rose-pattern”「薔薇」として表現している。ここで、パウンドは、砂鉄がマグネットと接触するのではなく、マグネットから隔たれた状態において、薔薇という渦巻き模様が現れるところを想像する。砂鉄とは、断片的な一つ一つのイメージのことである。つまり、マグネットである詩人は、砂鉄という、一つ一つの断片的なイメージを、自らの磁場に、サッと集めるのだ。こうして、流動的な力をもった詩人によって、集められたイメージは、引き寄せあって、ひとつの大きな美しい、秩序だった「渦巻き模様」をつくるのである。

3. パウンドの詩学：冒険としての船出

パウンドは、1916年に出版した *A memoir of Gaudier-Brzeska* においては、フォード・マックス・ヘファアの発言を引用し、雑誌 *Blast* とは、芸術家たちの“an adventure, an exploration”であったことを示した。パウンドの抑圧を嫌い、新たな自由を求める思考は、彼の詩的世界に対する態度にも共通している。すなわち、パウンドは、ひとつに固定されたものを嫌った。彼は、ひとつの国にとどまることもしなかったし、一神教にも反抗を示した。彼は、つねに、同一性に溶け込まず、互いに刺激しあうような渦巻きを心に描いていた。固定された形の思考を抜け出し、混ざり合ったイメージは、けして、停滞することがないからだ。

パウンドは、抑圧を解放する力を、聖性に結び付いた暴力的ともいえる自然のエネルギーと重ねあわせることにより、詩においてもその因襲的な縛めをほどこうとしたのだと考える。彼の多用する、生と死の交錯する冥界下りのモチーフからは、喪失と共に新たな世界の誕生を読み取ることができるのではないだろうか。

Primary Sources

Pound, Ezra. *Collected Early Poems of Ezra Pound*. Edited by Michael John King, New Directions, 1982.

---. *Gaudier - Brzeska*. New Directions, 1970.

---. *Guide to Kulchur*. New Directions, 1970.

---. *Hugh Selwyn Mauberley*. Ovid Press, 1920.

---. *Literary Essays of Ezra Pound*. Edited by T.S. Eliot, New Directions, 1968.

---. *Seventy Cantos*. Faber & Faber, 1950.

---. *The Cantos of Ezra Pound*. New Directions, 1950.

---. *The Letters of Ezra Pound 1907-1941*. Edited by D.D. Paige, New Directions, 1950.

---. *The Spirit of Romance*. J. M. Dent, 1910.

Secondary Sources

Byron, Mark. “Ezra Pound’s Seven Lakes Canto: Poetry and Painting, From East to West.” *The Rikkyo Review* 73 (2013), 121-142.

Moody, A, David. *Ezra Pound: Poet: I: The Young Genius 1885-1920*. Oxford University Press, 2009.

Ondrea, Ackerman. “The Periplus of The Pisan Cantos.” *Paideuma* 38 (2011), 89-118.